

# 桜草のお話 —姿を消していった植物たち—

春へのあこがれは、プリムラ（桜草）とともにやってくる。山々や平原が冬一色に染まっている頃、園芸店にはシクラメンやプリムラが春の予感を漂わせている。雪の下で、春を待っていたプリムラは、雪解けと同時に一斉に咲き始める。下北の春は庭先に色とりどりの花園を作る。これらはみな外国からやってきたサクラソウの仲間たちだ。けれども、野に咲くニホンサクラソウ（図1）の花を、今ではめったに目にする事は出来ない。

三沢や六ヶ所の人たちに聞くと、「昔はサクラソウの群落がこのあたりにもあった」という言葉を耳にする。馬の生産地であった三八上北地方は、放牧により、自然植生が草地のまま維持され、所々にサクラソウなどの群落が残っていた。時代が進み、馬の放牧がなくなり田畑や宅地等に開発されたので、サクラソウの生息場所がなくなってしまったのである。

『わが国における保護上重要な植物種の現状』（レッドデータブック）の最終リストには、絶滅種が35種、絶滅寸前（危惧）種が146種、危急種が678種、現状不明種が36種記載された。これらの合計は895種に及び、日本産野生植物の17%に値する。危険性の理由についてみると（表1）、山草家（業者）による園芸用の採集が28%、開発行為による自生地の破壊が43%を占めており、この二つが主要な理由である。エビネやアツモリソウといったラン科においては野生ランブームも手伝って、約



図1 サクラソウ（岩手県・盛岡）

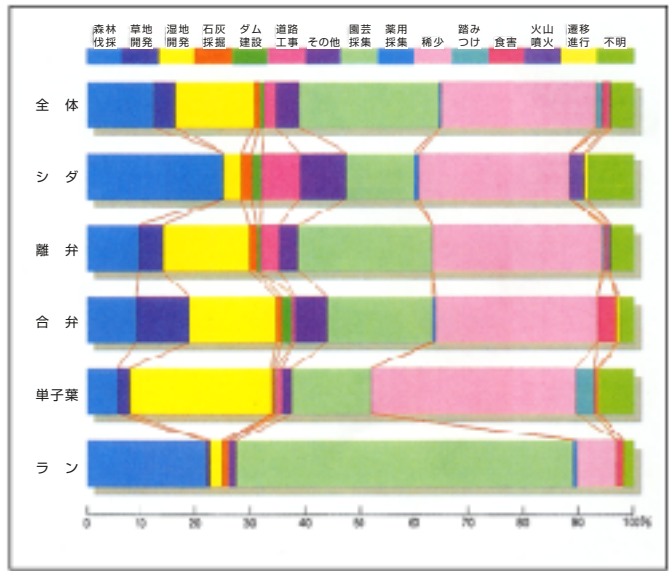


表1 野生植物の絶滅危険性の要因とその割合  
(レッドデータブック、日本植物分類学編、1993より引用)

70%が乱獲が原因で絶滅の危機に貧している。こうした現状をサクラソウを例に説明する。

サクラソウは北海道から九州まで、やや湿った火山灰土壌の落葉樹林や草原にかつては普通に見られた。その花の形、色などの多様性ゆえに、江戸時代に多くの園芸品種が作り出された（図2）。また、当時の荒川の河川敷に多くのサクラソウの産地があったことは、当時の名所案内や花鳥曆によつてもうかがわれる。昭和のはじめ頃には、そうした湿地が開発され姿を消していったようである。現代に荒川のサクラソウ原野の面影を伝える「田島ヶ原のサクラソウ自生地」は、昭和27年に題の特別天然記念物に指定された。

サクラソウの生育場所はカシワやクヌギ・ナラ類の落葉樹林やオギなどの湿地である場合が多い。いずれの場合も春先に落葉樹やオギが葉を展開する前に花を咲かせ、実をつける。また、サクラソウの種子はこうした春先の昼温と夜温の日格差が大きい場合のみ発芽が出来る。こうした生育地も湿地の開発や宅地化、炭を使わなくなったことによる雑木林の伐採と開発によって減少の一途をたどってきた。生育地の開発により、群落が分断・孤立化したことがさらに事態を悪化された。サクラソウは本来、同じ花の中での受粉（花粉がめしべにつくこと）を避ける仕組みが発達していて、異なる個体（群落）間での受粉の効率を上げてきた。つまり、おしべよりめしべは高い位置にある長花柱花と逆のタイプの短花柱花よりなる二型花柱性（図3）を持つ。これは、花蜜や蝶などが花を訪れて吸蜜した場合、細長い口器の先端には長花柱花の花粉が必ず付着し、根元には短花柱花の花粉が付着する。そして、次の花に吸蜜に移動した場合、必ず異なるタイプの花のめしべにのみ花粉が受粉されるのである。こうした特性は群落が分断・孤立化し花蜂や蝶などのポリネータ（送粉者）が来なくなると種の存続にとってマイナスに働き出す。サクラソウは栄養繁殖（種子による繁殖でなく地下茎などの増殖で株を増やす）で増えるので、数株は遺伝的に同じであり、群落が小さくなればなるほど近親交配になりやすく、近交弱勢になり種子ができなくなるのである。さらに、生育地周りの開発により、一年を通して花が咲かなくなると、ポリネータであるトラマルハナバチの生息が不可能になり、絶滅への拍車がかかることになるのである。

野の花が人々の心の中から先に消えたのが、風景の中から先に消えたのかはよく分からないが、自然は非常に多くの生物種を有し、多様性を保っている。この多様性が何を意味しているのか、人類の生存にとって何を教えられるのかは、姿を消してゆく生き物たちの声の中にヒントがあり、それを考えていかないといけないと思う。



図2 サクラソウの園芸品種

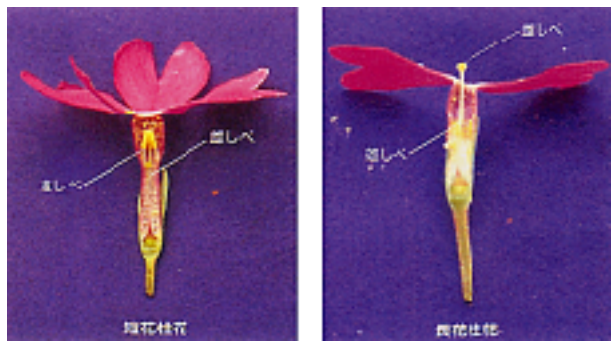


図3 サクラソウの二型花柱性と花のタイプ  
(週刊朝日百科、植物の世界、61号、1996年より引用)